

〔論 文〕

殺生行動に影響を与える生活体験と価値観

—小学生と中学生での関与の違い—

石井正子・三浦香苗

Influences of Experience in Real Life and Sense of Values on “Life-destroying Behavior”
—Focusing on differences between elementary school children
and junior high school students—

Masako ISHII and Kanae MIURA

This research was done in an attempt to find out what kind of experience in real life and sense of values are influential to life-destroying behaviors in elementary school children and junior high school students and how the relations are different among the two age-groups. The subjects who gave answers to our questionnaire were 225 elementary school children from 3 schools and 256 junior high school students also from 3 schools.

As for the factor analyses of their answers concerning their experiences in real life and sense of values, the two groups showed a similar five-factor structure but the factor structures of the life-destroying behavior in both groups were different.

Many experiences in real life correlated with life-destroying behaviors while correlations between the sense of values and life-destroying behavior were limited.

As for the results of a multiple linear regression analysis, only one factor ‘affirmation of violence & exclusion of the aged’ related to all the life-destroying behaviors. Their affinity to the nature had a positive influence to the elementary school children’s ‘unconscious killing with light motive’ and ‘killing waterside creatures’ and junior high school students’ ‘unconscious killing with light motive’ and ‘brutal killing’. The elementary school children’s experience of breeding pets had a negative influence to ‘killing familiar creatures’ and ‘killing small wild animals’. The junior high school students’ sense of ‘denial to physical punishment’ had a restrictive influence to their ‘unconscious killing with light motive’ and ‘brutal killing’.

Key words: life-destroying behavior (殺生行動), experience in real life (生活体験), sense of values (価値観), affinity to the nature (自然体験), brutal killing (嗜虐的殺生)

【問題と目的】

筆者らの従来の研究から、種々の生き物の生命を奪うことについて可能と考えるか否かは、対象となる生き物の種類・殺生の目的によって、違いがあるということがわかった。そして、殺生行動が可能か否かの判断基準が、年齢によって異なること、また、子ども時代にどのような生活体験をしてきたか、現在どのような価値観を持っているかに影響を受けることも明らかになった。

これまでの一連の研究の中では、大学生と教員を対象として、子ども時代の「生活体験」や現在の「価値観」が、個人が行えるとする「殺生行動」にどのような影響を与えるかについて分析を行ってきた(三浦ほか 2004, 2006)。大学生と教員を対象とした「生活体験」、「価値観」、そして「殺生行動」に関する質問紙調査からは、次のような結果が出ている。

殺生行動については「嗜虐のための殺生」、「目的のある殺生」、「快適性維持のための殺生」、「魚貝の殺生」という4因子、生活体験においては「仲間や

自然との体験」、「身近な死の体験」、「ペットの飼育体験」、「残虐なゲーム・マンガ体験」、「食物採集体験」という5因子、価値観については「体罰否定」、「危険許容」、「他者への関与」、「障害の受容」、「高齢者の否定」、「清潔重視」、「健康への関心」という7因子が抽出された。

「殺生行動」と、「価値観」・「生活体験」との関連を見たところ、全体的な傾向としては、価値観よりも生活体験の方が強い関連があった。ただし、関連の仕方は、下位尺度によって異なっていた。「嗜虐のための殺生」には価値観尺度のいずれもが有意に関与せず、生活体験尺度の「残虐なゲーム・マンガ体験」と「仲間や自然との体験」がプラスの、「ペットの飼育体験」がマイナスの回帰を示した。「目的のある殺生」には生活体験尺度の「残虐なゲーム・マンガ体験」がプラスの、価値観尺度の「清潔重視」がマイナスの回帰を示した。「快適性維持のための殺生」には、「高齢者の否定」と「仲間や自然との体験」がプラスの、「ペットの飼育体験」がマイナスの回帰を示した。「魚貝の殺生」には「食物採集体験」と「危険許容」がプラスの、「清潔重視」がマイナスの回帰を示した。

その後さらに、生き物のいのちを奪うことに、より多感であると思われる小・中学生を対象として、上記の調査と同様の質問紙調査を行い、個人が行えるとする「殺生行動」について、大学生、教員との比較を行った（石井・三浦 2007）。

その結果、小学生と中学生以上の年代では、殺生行動の分類基準に明確な違いが見られること、また、殺生行動の種類によって年齢的な変化に違いがみられること等が明らかになった。

ここでは、小・中学生に行った質問紙調査の結果を基に、「生活体験」や「価値観」の認識構造を分析する。さらに、「生活体験」や「価値観」と「殺生行動」の関連を見ることにより、それぞれがどのように「殺生行動」に影響を与えているかについて検討を行い、年齢によって関与の仕方に変化があるのかを比較する。

【方 法】

- 1 調査対象: 小学校5年生 225名と中学1年生 256名。小学生は、千葉市内の公立小学校3校から各2学級ずつ計6学級である。中学生も3校からの6学級である。これらの学校は、旧市街地、住宅地、郊外の新興住宅地から1校ずつ選んだ。
- 2 調査時期: 2005年3月
- 3 調査手続き: 以下に述べる質問紙調査は、学級活動の時間に、担任が、あらかじめ渡された調査趣旨を読み上げた後、児童・生徒が各人に配布された質問紙に回答を記入するという形で実施された。なお、児童・生徒向けの調査用紙にも調査趣旨を、「これは、中学生（小学生）の『いのち』に対する考え方が小学生のころ（今の）の体験やさまざまなものの見方とどのように関連しているのかを調べるための調査です。調査の結果は個人の情報として利用することは一切ありませんし、だれがどのような答えを書いたかはわからないようになっていきます。まじめに、自分の現在の考え方に近いところに○をつけてください。また、その理由の記入をお願いしているところは、できるだけ詳しく書いてください。」と明記した。調査結果は、回答記入後学級担任によって集められた。
- 4 調査内容: 調査趣旨が書かれた表紙に学校名・学年・組・性別の記入を求めた。以下提示したページ順に調査内容を記す。これらは、これまでの成人を対象とした研究で使用した質問と同様の質問項目を小・中学生向けに作成し使用したものである。原則として質問紙には、漢字に読み仮名をふった。

1) 殺生行動に対する賛否とその理由

具体的殺生行動4場面について、賛否を、(賛成・やや賛成・どちらでもない・やや反対・反対)の5段階評定で求めた。また、その理由についてそう考えた理由を自由記述で求めた。この部分に関する分析はすでに三浦ほか(2007)で報告しているので、ここでは扱わない。

2) 「生活体験」に関する質問

中学生向けには、「あなたの小学校時代を思い出してください。小学生時代の自分の経験に最も近いところに○をつけてください。」とし、表1に示す22項目について、「あてはまる、ややあてはまる、どちらでもない、あまりあてはまらない、あてはまらない」の5段階評定を求めた。小学生向けには、「小学生のあなたが今までしてきたことについて答えてください。」とし、言い回しを平易にした。

これらの22項目は、筆者らの以前の調査結果から想定された5種類の生活体験から抽出されたものである。

3) 「殺生行動」に関する質問

具体的な殺生行動ができるかどうかを見るために、「あなたは、以下のようなことができますか。あてはまると思うところに丸をつけてください。ここに書かれた動植物は全て生きているものです。

良いか悪いかには関係なく、あなた自身ができるかどうかだけを聞いています。」と表記し、三浦ほか(2004, 2006)で成人に使用した21項目と同様の項目について回答を求めた。具体的項目の内容は表3-1参照。回答は、「できる、たぶんできる、できるかどうかわからない、たぶんできない、できない」の5段階評定で求めた。

4) 「価値観」に関する質問

「次の文を読んで、自分の考え方や行動に一番近いと思うところの数字に○をつけてください」とし、表5に示す18項目について、「あてはまる、ややあてはまる、どちらでもない、あまりあてはまらない、あてはまらない」の5段階評定を求めた。これらの項目は、三浦ほか(2006)の研究で使用した尺度を基に、言い回しをわかりやすい表現にし、小・中学生では回答が困難と思われるいくつかの項目を削除し、代替の質問を挿入して使用した。

表1 生活体験項目 小・中学生平均値の比較

質問項目	小学生		中学生		有意差
	平均	SD	平均	SD	
1. 虫や小さな生き物を使ってよく遊んだ	2.94	1.51	2.87	1.41	
2. 家で犬や猫などのペットを飼っていた	3.43	1.85	3.04	1.87	*
3. たき火やかまどで火をおこしたことがある	2.28	1.66	3.12	1.73	**
4. 集団で(たくさんの友だちと一緒に)遊ぶことが多かった	3.94	1.14	4.11	1.05	
5. 残酷な戦闘場面のあるテレビゲームをやった	2.47	1.65	2.78	1.67	*
6. 身近な家族や友人(知っている人)の死を体験したことがある	3.65	1.70	3.35	1.82	
7. 自分で魚を釣ったり採ったりしたものを食べたことがある	2.27	1.66	3.15	1.73	**
8. 自然のものを利用して遊ぶことが多かった	3.49	1.35	3.18	1.32	*
9. 飼っていた動物が死んでしまったことがある	3.64	1.74	3.51	1.84	
10. 地域の子ども会行事等に積極的に参加していた	2.54	1.38	2.87	1.48	*
11. 外で遊ぶより、家の中で遊ぶ方が楽しかった	2.50	1.26	2.68	1.24	
12. 残酷な戦闘場面のあるマンガを読んだ	2.03	1.43	2.84	1.69	**
13. 人が死んだので泣いた経験(こと)がある	3.06	1.72	3.17	1.70	
14. 生きている魚をさばいているのをそばで見たことがある	2.58	1.69	3.12	1.71	**
15. 自然の中で遊ぶことはあまりなかった	2.52	1.39	2.42	1.15	
16. ペットの世話をした経験(こと)はない	1.69	1.24	1.99	1.44	*
17. 秘密基地を作って遊んだ	3.98	1.41	3.79	1.44	
18. いじめられたことがある	3.20	1.57	2.47	1.50	**
19. 残酷な場面のあるテレビは見なかった	3.21	1.55	2.65	1.47	**
20. お葬式やお通夜に出席したことがある	3.58	1.77	4.00	1.65	*
21. 自分でヨモギや野草を採って食べたことがある	1.87	1.47	2.31	1.62	**
22. 物語を読んだり、テレビドラマを見るのが好きだった(ことがよくある)	4.36	1.00	4.13	1.14	*

()内は下線部の小学生に用いた言い回し

*... $p < 0.01$ *... $p < 0.05$

【結果と考察】

実際に児童・生徒に提示した順序で結果を記述する。

1. 生活体験に関する結果

1) 項目別結果

表1に生活体験に関して実施した22項目について、「あてはまる」を5、「あてはまらない」を1として平均値と標準偏差を小・中学生別に示す。また、平均値の差の検定によって、どの水準での有意性が見られたかも示す。

小学生で最も数値の低いものは、「16. ペットの世話をした経験はない」の1.69で、最も高いものは「22. 物語を読んだり、テレビドラマを見るのが好きだった」の4.36である。中学生でも、最も数値の低い項目が「16. ペットの世話をした経験はない」で、最も数値の高い項目が「22. 物語を読んだり、テレビドラマを見るのが好きだった」であることは共通するが、その数値はそれぞれ1.99と4.13である。一般に中学生の方が、体験をしたことを示す数値は高いが、小学生の方が有意に数値が高い項目には、「2. 家で犬や猫などのペットを飼っていた」と「22. 物語を読んだり、テレビドラマを見るのが好きだった（ことがよくある）」のみであった。中学生の方が有意に高いもので顕著なものは、「3. たき火やかまどで火をおこしたことがある」、「7. 自分で魚を釣ったり採ったりしたものを食べたことがある」、「12. 残酷な戦闘場面のあるマンガを読んだ」、「14. 生きている魚をさばいているのをそばで見たことがある」、「21. 自分でヨモギや野草を採って食べたことがある」で、これらの差異は、発達差（小学5年生と中学1年生）あるいは時代差（2年の差でしかない）を示しているものと思われる。

2) 因子分析結果

小学生・中学生別に主因子法・プロマックス回転で因子分析を行い、以前の研究から想定できた5因子解を求めた。小学生では、全分散の42.9%を説明し、中学生では49.9%を説明した。両群の因子分析結果では、該当する項目に多少の差異がみられるが、それぞれの因子に適当な名称は同一のもので

あった。そこで、小・中学生のデータを合わせて因子分析を行った。固有値1以上の因子解は7であったが、想定した5因子解を採用した。5因子解では全分散の45.5%を説明している。表2-1に示す。

第1因子は、「8. 自然のものを利用して遊ぶことが多かった」、「21. 自分でヨモギや野草を採って食べたことがある」、「7. 自分で魚を釣ったり採ったりしたものを食べたことがある」などの7項目の因子負荷量が高く、「自然体験」と命名できる。第2因子は、「12. 残酷な戦闘場面のあるマンガを読んだ」、「5. 残酷な戦闘場面のあるテレビゲームをやった」、「19. 残酷な場面のあるテレビは見なかった（逆転）」の3項目の因子負荷量が高く、「残酷なゲームやマンガ体験」と命名できる。第3因子は、「6. 身近な家族や友人の死を体験したことがある」、「20. お葬式やお通夜に出席したことがある」、「13. 人が死んだので泣いた経験がある」の3項目に因子負荷量が高く、「身近な死の体験」と命名できる。第4因子は、「2. 家で犬や猫などのペットを飼っていた」、「16. ペットの世話をした経験はない（逆転）」、「9. 飼っていた動物が死んでしまったことがある」の3項目の因子負荷量が高く、「ペットの飼育体験」と命名できる。第5因子は、「11. 外で遊ぶより、家の中で遊ぶ方が楽しかった（逆転）」、「4. 集団で遊ぶことが多かった」の2項目の因子負荷量が高く、「集団遊び体験」と命名できる。

当該因子に.35以上、他因子に.30未満の負荷量を持つ項目で、それぞれの因子尺度を構成した。

表2-2は、生活体験の5因子尺度の、小・中学生別平均値と標準偏差および両群間の有意性を示す。項目別結果の個所で述べたことと類似した結果であるが、第1因子尺度の「自然体験」と第2因子尺度の「残酷なゲームやマンガ体験」では、中学生の結果の方が高く、第4因子尺度の「ペットの飼育体験」は小学生の方が高い。

α 係数は「身近な死の体験」で.72を示すが、他の因子はすべて.70未満で、最も低い「集団遊び体験」は.44であり、安定性は高いとは言えない。

表 2-1 生活体験項目因子分析の結果

質問項目	因 子				
	I	II	III	IV	V
8. 自然のものを利用して遊ぶことが多かった	.61	-.09	.02	.01	-.07
21. 自分でヨモギや野草を採って食べたことがある	.52	-.11	.08	-.01	.08
7. 自分で魚を釣ったり採ったりしたものを食べたことがある	.48	-.01	-.14	.02	.06
3. たき火やかまどで火をおこしたことがある	.42	.12	.02	-.07	.06
15. 自然の中で遊ぶことはあまりしなかった	-.41	.15	.00	-.08	.07
1. 虫や小さな生き物を使ってよく遊んだ	.39	.16	-.03	.01	-.10
14. 生きている魚をさばいているのをそばで見たことがある	.38	.19	-.12	-.03	.13
17. 秘密基地を作って遊んだ	.30	.11	.08	.00	-.23
10. 地域の子ども会行事等に積極的に参加していた	.20	-.15	.06	-.01	-.05
12. 残酷な戦闘場面のあるマンガを読んだ	-.05	.77	.04	.00	.04
5. 残酷な戦闘場面のあるテレビゲームをやった	.02	.72	.04	.03	-.08
19. 残酷な場面のあるテレビは見なかった	.04	-.52	.06	.00	.02
6. 身近な家族や友人の死を体験したことがある	-.09	.03	.85	.02	-.03
20. お葬式やお通夜に出席したことがある	.08	.05	.63	-.02	.05
13. 人が死んだので泣いた経験がある	.05	-.11	.59	-.04	.06
22. 本を読んだり、テレビドラマを見るのが好きだった	-.10	.03	.19	.08	-.03
2. 家で犬や猫などのペットを飼っていた	.00	.01	.01	.71	.05
16. ペットの世話をした経験はない	.04	.02	.04	-.61	.07
9. 飼っていた動物が死んでしまったことがある	.07	.06	.05	.58	.08
11. 外で遊ぶより家の中で遊ぶ方が楽しかった	.00	.18	.03	-.01	.64
4. 集団で遊ぶことが多かった	.06	.20	.01	-.03	-.50
18. いじめられたことがある	.09	-.04	.11	.06	.17

表 2-2 生活体験尺度 因子別平均値の小・中学生比較と α 係数

因子名		全 体	小	中	有意差	α	構成する項目番号 ()内は逆転項目
		平均(SD)	平均(SD)	平均(SD)			
I	自然体験	2.87(0.87)	2.69(0.83)	3.04(0.88)	**	.63	8, 21, 7, 3, 15, 1, 14
II	残酷なゲームやマンガ体験	2.73(1.26)	2.43(1.10)	2.99(1.34)	**	.69	12, 5, (19)
III	身近な死の体験	3.46(1.39)	3.42(1.37)	3.50(1.41)		.72	6, 20, 13
IV	ペットの飼育体験	3.66(1.29)	3.83(1.16)	3.52(1.39)	**	.65	2, (16), 9
V	集団遊び体験	3.72(0.94)	3.72(0.97)	3.72(0.92)		.44	(11), 4

***p<0.01

2. 殺生行動に関する結果

この部分についての結果は、すでに石井ほか(2006)、石井・三浦(2007)で報告されているので、ここでは、以下の分析に必要な部分のみ示す。

1) 小学生の結果

表 3-1 に、項目別平均・標準偏差および主因子法プロマック回転の因子分析結果を示す。固有値 1 以上の因子解は 5 因子解で全体の 64% を説明している。当該因子に最も高い因子負荷量を示す、負荷

量 .35 以上の項目を基準にして項目を選択した。

第 1 因子は「面白いのでカブトムシのお腹にナイフを突き刺す」、「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」、等の 7 項目からなり、「身近な生き物の殺生」と命名した。第 2 因子は、「部屋に活けるために花壇の花を切る」、「風通しをよくするために、木の枝を切る」、「生きている貝でみそ汁を作る」等の 4 項目からなり、「殺生意識が希薄な殺生」とした。第 3 因子は「理科の勉強のために、フ

表 3-1 殺生行動 小学生因子分析の結果

質問項目	因 子				
	I	II	III	IV	V
11. 面白いのでカブトムシのお腹にナイフを突き刺す	.91	.06	-.06	-.01	-.03
2. ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	.74	-.01	-.04	-.02	-.04
15. 理科の勉強で、犬の解剖をする	.69	-.06	.27	-.29	-.01
3. 飼っていたにわとりの首を食べるために絞めて殺す	.69	.03	.05	.12	-.04
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので飼っていたオンドリを殺す	.46	-.03	-.13	.25	.07
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	.46	.09	.14	.21	-.02
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	.35	-.05	.25	.19	.06
13. 部屋に活けるために花壇の花を切る	.07	.87	-.10	-.15	-.01
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	.06	.81	-.05	-.03	-.04
17. 生きている貝でみそ汁を作る	-.05	.46	.13	.04	-.03
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	-.15	.36	.31	.27	.05
1. 理科の勉強のために、フナの身体をばらばらにして調べる	.06	-.10	.83	.01	-.10
8. 食べるために、釣ってきた魚をさばく	.02	.21	.61	-.09	-.02
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	.31	-.10	.44	.03	.15
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	.01	-.11	.04	.90	-.09
10. 飛んできたせみを火の中に投げ入れる	.39	.08	-.18	.57	-.01
6. 突然に道に出てきた蛇を棒で叩いて殺す	-.07	.02	.41	.49	-.01
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙で叩き殺す	-.03	-.07	-.09	-.11	.91
18. ハエをはえたたきで潰す	-.20	.23	.16	.02	.50
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣を壊す	.29	.05	.03	-.10	.46
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	.08	-.01	-.13	.31	.45

表 3-2 小学生殺生行動尺度の因子別平均値と α 係数

因子名		尺度得点(SD)	α 係数	構成する質問項目
I	身近な生き物の殺生	1.23(0.47)	.83	11, 2, 15, 3, 21, 20, 5
II	殺生意識が希薄な殺生	2.99(1.13)	.75	13, 9, 17, 7
III	水辺の生き物の殺生	1.98(0.92)	.71	1, 8, 14
IV	野生小動物の殺生	1.73(0.92)	.76	19, 10, 6
V	快適性維持のための殺生	2.71(0.97)	.72	12, 18, 4, 16

ナの身体をばらばらにして調べる」、「食べるために、釣ってきた魚をさばく」等の3項目からなり「水辺の生き物の殺生」とした。第4因子は「ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める」「突然に道に出てきた蛇を棒で叩いて殺す」、等の3項目からなり「野生小動物の殺生」とした。そして、第5因子は「部屋の中に入ってきたクモを新聞紙で叩き殺す」、「ハエをはえたたきで潰す」等の4項目からなり「快適性維持のための殺生」と命名した。

採択された項目によって構成した各因子尺度の平均点と標準偏差を、表3-2に示す。 α 係数はすべての尺度で.70を超えており、安定性を示す。

小学生の場合には、身近な愛着のある生き物か、野生の生き物か、水辺の生き物かというように、対象の種類によって因子が分かれる傾向がある。

2) 中学生の結果

表4-1に中学生の結果を示す。固有値1以上の因子解は4因子解で全体の60%を説明している。

当該因子に最も高い因子負荷量を示す、負荷量.40以上の項目を基準にして項目を選択したが、解釈が困難であったため、複数の因子に高い負荷量を示した項目（「11. 面白いのでカブトムシのお腹にナイフを突き刺す」）を除外して再分析を行い、負荷量.40以上を基準にして項目を選択し、解釈可能な4

表 4-1 殺生行動 中学生因子分析の結果

質問項目	因 子			
	I	II	III	IV
2. 転居で飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	.83	-.05	.20	-.13
3. 飼っていた鶏の首を食べるために絞めて殺す	.79	.10	-.10	.06
15. 理科の授業で、犬の解剖をする	.69	.11	-.04	-.01
21. 近所から苦情がきたので飼っていたオンドリを殺す	.67	-.17	.24	.10
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	.33	.16	.30	.08
8. 食べるために、釣ってきた魚をさばく	.13	.66	.05	-.09
1. 理科の実験のために、フナを解剖する	.25	.59	.00	-.11
17. 生きている貝でみそ汁を作る	-.04	.59	.00	.08
13. 部屋に活けるために花壇の花を切る	-.04	.50	-.01	.13
9. 風通しをよくするために、木を切り倒す	.02	.25	.12	.14
10. 飛んできたせみを火の中に投げ入れる	.11	-.04	.73	.04
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	.23	-.09	.66	-.01
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	-.18	.36	.58	-.10
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	.11	.20	.52	-.02
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	.13	-.12	.40	.38
6. 突然に道に出てきた蛇を棒で叩いて殺す	.03	.11	.38	.26
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	.26	-.08	-.05	.73
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙で叩き殺す	-.24	.16	.25	.47
18. ハエをはえたたきで潰す	-.24	.31	.17	.43

表 4-2 中学生殺生行動尺度の因子別平均値と α 係数

因子名	尺度得点(SD)	α 係数	構成する質問項目
I 目的のある殺生	1.39(0.77)	.89	2, 3, 15, 21
II 殺生意識が希薄な殺生	3.25(1.11)	.72	8, 1, 17, 13
III 嗜虐的殺生	2.18(1.05)	.82	10, 20, 7, 5, 19
IV 快適性維持のための殺生	3.18(1.14)	.69	16, 12, 18

因子解を採用した。4 因子解で全体の 51% を説明している。

第 1 因子は「転居で飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」、「近所から苦情がきたので飼っていたオンドリを殺す」、等の 4 項目からなり「目的のある殺生」と命名した。第 2 因子は、「食べるために、釣ってきた魚をさばく」、「部屋に活けるために花壇の花を切る」等の 4 項目からなり「殺生意識が希薄な殺生」とした。第 3 因子は、「飛んできたせみを火の中に投げ入れる」「コオロギの足をもいで歩けなくする」等の 5 項目からなり「嗜虐的殺生」とした。第 4 因子は「カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す」、「部屋の中に入ってきたクモを新聞紙で叩き殺す」、等の 3 項目からなり「快適性維持のための殺生」と命名した。

採択された項目によって構成した各因子尺度の平均点と標準偏差を、表 4-2 に示す。 α 係数は「快適性維持のための殺生」の .69 が最も低く、他の因子尺度では .70 を超えており、比較的值は高く尺度としての安定性を示す。

中学生では、「嗜虐的か」、「何らかの目的のためか」というように殺生の目的によって因子が分かれる傾向がみられる。石井・三浦（2007）で明らかにしたように、この傾向は大学生や教員にも当てはまる。

3. 価値観に関する結果

1) 項目別結果

表 5 に価値観に関して実施した 18 項目について、「あてはまる」を 5、「あてはまらない」を 1 として

表5 価値観項目 小・中学生の平均値の比較

質問項目	小学生		中学生		有意差
	平均	SD	平均	SD	
1. 少しくらいけがをしたり、あぶないことがあっても川や池などでいろいろな活動することは大切だ	3.37	1.31	3.77	1.16	**
2. 学校から帰る時にあやしいおとなにつれていかれそうになっている友だちを見たら、何とかして助ける	4.36	0.90	4.16	0.94	*
3. やっても良いことと悪いことのちがいを教えるためにおとなが子どもをたたくことはしかたがない	3.03	1.43	2.82	1.35	
4. 自然を守るためだとしても、水洗トイレが無い場所にとまるのはいやだ	3.54	1.47	3.67	1.33	
5. おとしよりから同じ話を何度も聞かされるとうんざりする	3.19	1.42	3.27	1.32	
6. なぐられたらなぐり返すのはあたりまえだ	3.13	1.37	3.35	1.28	
7. けがややけどの危険があっても、ナイフや火を使ってみることは必要だ	2.65	1.45	3.65	1.31	**
8. 自分が急いで買おうとしている時に、おとしよりが自動販売機の前でモタモタしていたらイライラする	2.92	1.45	2.96	1.41	
9. 池に落ちておぼれている子どもがいたら何とかして助ける	4.19	1.07	3.98	1.12	*
10. 話してもわからない相手には暴力を使うのも仕方がない	2.14	1.20	2.42	1.28	*
11. 親が子どもをたたくことはいけないことである	3.07	1.32	3.34	1.28	*
12. あきらかにいじめられている小さい子がいたら助ける	4.03	1.04	3.66	1.13	**
13. 自然を守るためでも、洗剤やシャンプーがなければ生活できない	3.06	1.47	3.63	1.32	**
14. 少しでもけがや事故の危険があるような体験はしたくない	3.42	1.40	3.13	1.37	*
15. 自分がおとなになったら、子どもが悪いことをしても子どもをたたいたりはしないだろう	2.92	1.29	3.12	1.18	
16. 人生の先輩としてのおとしよりからいろいろな話を聞くことはためになる	4.11	1.06	3.87	1.10	*
17. 食事の前には必ず手を洗う	4.00	1.16	3.91	1.19	
18. どんな理由があっても、暴力をふるうのはいけないことだ	3.48	1.20	3.30	1.24	

**…p<0.01 *…p<0.05

平均値と標準偏差を小・中学生別に示す。また平均値の差の検定によって、どの水準での有意性が見られたかも示す。

小学生では、「10. 話してもわからない相手には暴力を使うのも仕方がない」の2.14が最も低く、「2. 学校から帰る時にあやしいおとなにつれていかれそうになっている友達を見たら、何とかして助ける」の4.36が最も高い。中学生では、それぞれ同一の項目が、2.42と4.16である。小学生の方が価値観の値の分布に幅があるといえよう。

平均値が小学生の方が有意に高い項目は5項目、中学生の方が高い項目も5項目である。小学生の方が高い項目は、「2. 学校から帰る時にあやしいおとなにつれていかれそうになっている友だちを見たら、

何とかして助ける」、「9. 池に落ちておぼれている子どもがいたら何とかして助ける」、「12. あきらかにいじめられている小さい子がいたら助ける」、「14. 少しでもけがや事故の危険があるような体験はしたくない」、「16. 人生の先輩としてのおとしよりからいろいろな話を聞くことはためになる」である。中学生の方が高い項目は、「1. 少しくらいけがをしたり、あぶないことがあっても川や池などでいろいろな活動することは大切だ」、「7. けがややけどの危険があっても、ナイフや火を使ってみることは必要だ」、「10. 話してもわからない相手には暴力を使うのも仕方がない」、「11. 親が子どもをたたくことはいけないことである」、「13. 自然を守るためでも、洗剤やシャンプーがなければ生活できない」

である。小学生の方が、正義感にあふれ、危険を避けるという建前的な価値観であるのに対し、中学生はある程度の危険を冒しても様々な活動を行うことに肯定的で、体罰には否定的な考え方を示していると思われる。より大人の考え方や本音に近い考えといえよう。

2) 因子分析結果

小学生と中学生とでは、価値観に違いがあると想定されるので、両者を別々に主因子法・プロマックス回転の因子分析を行った。抽出されたそれぞれの因子を構成する因子負荷量の高い項目には多少の差異はあったが、因子構造そのものは、類似したものと判断できたので、小・中学生を合わせて因子分析を行った。主因子解で固有値が1以上の因子が5であったので、因子数を5と固定した主因子法・プロ

マックス回転を実施した。5因子解では全分散の53.1%を説明している。表6-1に結果を示す。

第1因子は、「9. 池に落ちておぼれている子どもがいたら何とかして助ける」、「2. 学校から帰る時にあやしいおとなにつれていかれそうになっている友達を見たら、何とかして助ける」、「12. あきらかにいじめられている小さい子がいたら助ける」に因子負荷量が高く、「他者への関与」と命名できよう。第2因子は、「6. なぐられたらなぐり返すのはあたりまえだ」「5. おとしよりから同じ話を何度も聞かされるとうんざりする」、「8. 自分が急いで買おうとしている時に、おとしよりが自動販売機の前でモタモタしていたらイライラする」「10. 話してもわからない相手には暴力を使うのも仕方がない」、「16. 人生の先輩としてのおとしよりからいろいろ

表 6-1 価値観項目因子分析の結果

質問項目	因 子				
	I	II	III	IV	V
9. 池に落ちておぼれている子どもがいたら何とかして助ける	.74	.12	-.01	-.01	.00
2. 学校から帰る時にあやしいおとなにつれていかれそうになっている友達を見たら、何とかして助ける	.70	.05	.03	.08	-.12
12. あきらかにいじめられている小さい子がいたら助ける	.63	-.03	-.02	-.06	-.06
17. 食事の前には必ず手を洗う	.21	-.17	.07	-.05	.14
6. なぐられたらなぐり返すのはあたりまえだ	.20	.63	-.01	.12	-.04
5. おとしよりから同じ話を何度も聞かされるとうんざりする	.06	.52	.02	-.12	.16
8. 自分が急いで買おうとしている時に、おとしよりが自動販売機の前でモタモタしていたらイライラする	-.05	.49	-.06	-.07	.33
10. 話してもわからない相手には暴力を使うのも仕方がない	.00	.45	.06	.05	-.11
16. 人生の先輩としてのおとしよりからいろいろな話を聞くことはためになる	.20	-.38	-.06	.21	.02
18. どんな理由があっても、暴力をふるうのはいけないことだ	.20	-.36	.04	-.18	.26
11. 親が子どもをたたくことはいけないことである	-.01	.05	.75	.08	.09
3. やっても良いことと悪いことのちがいを教えるためにおとなが子どもをたたくことはしかたがない	.05	-.01	-.70	.01	.11
15. 自分がおとなになったら、子どもが悪いことをしても子どもをたたいたりはしないだろう	.08	-.02	.51	-.07	.10
7. けがややけどの危険があっても、ナイフや火を使ってみることは必要だ	-.06	.02	-.02	.70	.25
1. 少しくらいけがをしたり、あぶないことがあっても川や池などでいろいろな活動することは大切だ	.12	-.04	-.02	.60	.05
14. 少しでもけがや事故の危険があるような体験はしたくない	.07	.01	-.08	-.42	.19
13. 自然を守るためでも、洗剤やシャンプーがなければ生活できない	-.06	-.02	.04	.12	.54
4. 自然を守るためだとしても、水洗トイレが無い場所にとまるのはいやだ	-.07	.04	.00	.02	.54

表 6-2 価値観尺度 因子別平均値の小・中学生比較 と α 係数

因子名		全体	小	中	有意差	α 係数	構成する項目番号 ()内は逆転項目
		平均(SD)	平均(SD)	平均(SD)			
I	他者への関与	4.06(0.81)	4.19(0.76)	3.94(0.83)	**	.67	9, 2, 12
II	暴力肯定・高齢者排除	2.72(0.74)	2.63(0.72)	2.80(0.76)	*	.61	6, 5, 8, 10, (16), (18)
III	体罰否定	3.11(1.02)	2.98(1.07)	3.21(0.96)	*	.67	11, (3), 15,
IV	危険許容	3.16(0.99)	2.87(0.97)	3.43(0.93)	**	.54	7, 1, (14)
V	清潔重視	3.48(1.15)	3.28(1.20)	3.65(1.08)	**	.51	13, 4

* * * * * $p < 0.01$ * * * * * $p < 0.05$

な話を聞くことはためになる(逆転)」、「18. どんな理由があっても、暴力をふるうのはいけないことだ(逆転)」に負荷量が高く、「暴力肯定・高齢者排除」と命名できよう。第3因子は、「11. 親が子どもをたたくことはいけないことである」、「3. やっても良いことと悪いことの違いを教えるためにおとなが子どもをたたくことはしかたがない(逆転)」、「15. 自分がおとなになったら、子どもが悪いことをしても子どもをたたいたりしないだろう」に負荷量が高く、「体罰否定」と命名できる。第4因子は、「7. けがややけどの危険があっても、ナイフや火を使ってみることは必要だ」、「1. 少しくらいけがをしたり、あぶないことがあっても川や池などでいろいろな活動することは大切だ」、「14. 少しでもけがや事故の危険があるような体験はしたくない(逆転)」に負荷量が高く、「危険許容」と命名できよう。第5因子は、「13. 自然を守るためでも、洗剤やシャンプーがなければ生活できない」、「4. 自然を守るためだとしても、水洗トイレが無い場所にとまるのはいやだ」に因子負荷量が高く、「清潔重視」と命名できよう。

当該因子 .35 以上、他因子への負荷量が .30 未満の項目で、各因子尺度を構成した。

表 6-2 は、価値観に関する各因子尺度の因子尺度別平均値と標準偏差、および両群間の有意差の検定結果である。

「他者への関与」では小学生群の値が高く、「暴力肯定・高齢者排除」、「体罰否定」、「危険許容」、「清潔重視」では中学生群の値が高い。小学生が社会的に望ましい、あるいは建前的な考え方を持っているのに対し、中学生では現代の青年あるいは大人の本

音に近い価値観を持っていると推定される。

α 係数は最も高い「他者への関与」と「体罰否定」で .67、最も低い「清潔重視」では .51 で、尺度としての安定性は不十分である。

4. 殺生行動に生活体験と価値観が及ぼす影響

これまでの分析から、殺生行動の構造は小学生と中学生では異なること、生活体験と価値観は各因子尺度の得点には差異があるが構造そのものは小・中学生では類似したものであることが明らかにされた。ここでは、小学生と中学生の殺生行動に生活体験と価値観がどう関わるかを見ることによって、生活体験と価値観の、殺生行動に及ぼす影響について、検討することにする。

そのため、小学生と中学生別に、殺生行動の下位尺度を基準変数にし、生活体験と価値観を説明変数とする重回帰分析を行った。結果は、以下のとおりである。なお、数値は標準偏回帰係数であり、およそ数値が .120 以上が $p < 0.05$ 、.200 以上が $p < 0.01$ 、.280 以上が $p = .00$ の有意水準である。

小学生

{身近な生き物の殺生}

= -.144 (ペットの飼育体験)

+ .252 (暴力肯定・高齢者排除)

{殺生意識が稀薄な殺生}

= .214 (自然体験)

+ .284 (暴力肯定・高齢者排除)

{水辺の生き物の殺生}

= .207 (自然体験)

+ .353 (暴力肯定・高齢者排除)

{野生小動物の殺生}

= -.129 (ペットの飼育体験)

-.191 (他者への関与)

+.330 (暴力肯定・高齢者排除)

{快適性維持のための殺生}

= .171 (残酷なゲーム体験)

+.254 (暴力肯定・高齢者排除)

中学生

{目的のある殺生}

= .158 (残酷なゲーム体験)

+.289 (暴力肯定・高齢者排除)

{殺生意識が稀薄な殺生}

= .264 (自然体験)

-.157 (身近な死の体験)

+.227 (暴力肯定・高齢者排除)

-.133 (体罰否定) + .174 (危険許容)

{嗜虐的殺生}

= .158 (自然体験) + .132 (残酷なゲーム体験)

+.343 (暴力肯定・高齢者排除)

-.121 (体罰否定) + .212 (危険許容)

{快適性維持のための殺生}

= .368 (暴力肯定・高齢者排除)

小・中学生の全ての殺生行動に、価値観の第2尺度である「暴力肯定・高齢者排除」がプラスの回帰を持っていることがまず、特筆される。安易な暴力への依存と社会的弱者への配慮のなさが、われわれが考えたあらゆる種類の殺生行動を生起させている基底にあると考えることができよう。

殺生行動にマイナスに働く生活体験や価値観としては、小学生の場合は、{身近な生き物の殺生}に、「ペットの飼育体験」、{野生小動物の殺生}に「ペットの飼育体験」と「他者への関与」があり、中学生の場合には、{殺生意識が稀薄な殺生}に「身近な死の体験」と「体罰否定」が、また{嗜虐的殺生}に「体罰否定」がある。これらの殺生行動を抑制するものは日常的なやさしい自然や人への対応と考えられる。

ところで、すべての殺生行動と関与しているわけではないが、「自然体験」は、小学生の場合は、{殺

生意識が稀薄な殺生}や{水辺の生物の殺生}、中学生の場合は{殺生意識が稀薄な殺生}と{嗜虐的殺生}にプラスに関与している。自然と触れ合う中では、当然他の生き物を殺したり切ったりすることを経験することになるが、これは人間が生きるために必要な殺生でもある。これらと面白半分には他の生き物の生存を抹殺することとを区別して教育していかなくてはならない。

【まとめと討論】

小学生 225 名、中学生 256 名を対象に、各種の「いのち」を殺生する行動ができるかどうかを調べ、それらが彼らの生活体験や価値観とどのような関連性を持つかについて分析を試みた。

生活体験について問う 22 項目は、「自然体験」、「残酷なゲームやマンガ体験」、「身近な死の体験」、「ペットの飼育体験」、「集団遊び体験」の 5 下位尺度に類別された。価値観を問う 18 項目は、「他者への関与」、「暴力肯定・高齢者排除」、「体罰否定」、「危険許容」、「清潔重視」の 5 下位尺度に類別された。

殺生行動について、それらの行動が可能か否かを問う 21 項目は、小学生と中学生では、因子構造が異なったため、別々に下位尺度を作成した。小学生では、「身近な生き物の殺生」、「殺生意識が稀薄な殺生」、「水辺の生き物の殺生」、「野生小動物の殺生」、「快適性維持のための殺生」の 5 つに区分された。中学生の結果は、「目的のある殺生」、「殺生意識が稀薄な殺生」、「嗜虐的殺生」、「快適性維持のための殺生」の 4 つに区分された。

それぞれの殺生行動尺度に関与する生活体験と価値観は異なり、すべてに関与するものは、「暴力肯定・高齢者排除」のみであった。他の体験や価値観の殺生行動への関与は、殺生行動の種類によって異なっていた。「ペットの飼育体験」や「身近な死の体験」は、マイナスの効果を、「自然体験」や「残酷なゲーム体験」はいくつかの殺生行動にプラスの効果を持っていた。また、中学生では「体罰否定」がマイナスの効果を持っていた。

「殺生行動」といっても、小学生と中学生ではそ

の認識構造が異なるという知見は、彼らへの働きかけを考えると異なる配慮が必要であることを示す。また、殺生行動の具体的種類によって、関与する体験や価値観が異なることも、それらを踏まえた上での指導の必要性を示唆する。

今回、殺生行動について尋ねたのは、それらの行動ができると思うか否かということであり、一種の殺生行動の実行可能性である。殺生行動の実行可能性と、具体的な殺生行動を実行に移すこととの間には隔たりがある。そして実行に移される殺生行動は、可能性があることの一部であると思われるが、それが、どういう心的機制によるのかを明らかにすることが、子どもたちに「いのちの大切さ」を伝え、安易に殺生を行うことを抑制する方法を考える上で重要な視座となるのではないだろうか。

る認識の発達 I—具体的殺生場面への賛否と判断理由の分析— 学苑 796 号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 67-77

(いしい まさこ 初等教育学科)
(みうら かなえ 心理学科)

引用・参考文献

- 石井正子・三浦香苗 2007 殺生行動に関する認識の発達Ⅱ—殺生行動項目の因子分析を通して—学苑 796 号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 78-89
- 石井正子・三浦香苗・鈴木陽介 2004 「いのち」に関わる意識と生活体験 3—生活体験・価値観尺度の再検討と殺生行動との関連—日本教育心理学会 第 46 回総会 発表論文集 p. 349
- 石井正子・三浦香苗・田中千穂 2006 「いのち」に関わる意識と生活体験 7—小・中学生における、殺生行動に関する意識の分析—日本教育心理学会 第 48 回総会 発表論文集 p. 718
- 石井正子・三浦香苗・田中千穂 2007 「いのち」に関わる意識と生活体験 9—小・中学生の生活体験・価値観と殺生行動との関連—日本教育心理学会 第 49 回総会 発表論文集 p. 533
- 三浦香苗・長澤陽平・石井正子 2004 大学生向け殺生行動尺度の作成の試み—子ども時代の生活体験の効果の分析を通して—学苑 761 号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 27-40
- 三浦香苗・石井正子・田中千穂 2006 学生・教員の殺生行動に関する認識構造を規定する要因—生活体験・価値観・殺生可能性は殺生への態度に影響を与えるか—学苑 784 号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 33-40
- 三浦香苗・田中千穂・石井正子 2007 殺生行動に関す